

二重峠

二重峠は阿蘇の神話のひとつに関連付けられています。伝説によると、健甕龍命（たけいわたつのみこと）という神が、当時巨大な湖であった阿蘇カルデラの壁を蹴破って中の水を空にしようとしたそうです。健甕龍命は頑張りましたが、壁に穴をあけることはできませんでした。なぜなら、壁は二重の厚みがあったからです。二重峠の名前の「二重」という言葉は、層が二つあるという意味です。

日本中の大名が「参勤交代」という制度のもと一年おきに江戸まで旅をしなければならなかった江戸時代（1603-1868）にも、この峠は重要でした。この制度は、大名たちを江戸（現在の東京）と自藩に一年ずつ交互に住まわせることにより、徳川幕府が大名たちを支配することを可能にしました。江戸と自藩の移動は、徒歩を主とした長い行列で行われ、阿蘇の大名は、この豊後街道と呼ばれる舗装された道から江戸への旅に出発しました。この道は、かつて九州東岸の現在の大分市があるところまで途切れず伸びており、大名と家来たちはそこから船に乗って本州まで向かいました。

この時代の石畳の大部分は今日でも峠で目にすることができます。石畳の敷設は当時の一大事業であり、近隣の複数の村が工事に参加しました。村の誇りを示して、岩坂村から来た人々の一部は村の名前をいくつかの石に刻みました。峠を歩き、歴史を追体験しながら、この文字が見つかるか探してみてください。